研究ノート

外国貿易の理論的位置づけについて（下）

——世界経済論の方法の問題によせて——

丹羽克治

はしがき
一　経済学的範疇の論理的意義
　——歴史的発展との関連について——
二　外国貿易の歴史的性格についての諸見解
　1　「歴史的性格と理論的研究の対立」の視角(一)
　　——木下悦二氏の所論——
　2　「歴史的性格と理論的研究の対立」の視角(二)
　　——有賀定彦氏の所論——……（以上、前号所載）
　3　「資本主義の歴史的性格への解消」の視角
　　——岡田裕之氏の所論——
三　外国貿易の必然性についての古典的規定
　——レーニンの命題を中心にして——
　1　ナロードニキ批判の論点
　2　外国貿易の必然性の規定
むすび……（以上、本号所載）

3　「資本主義の歴史的性格への解消」の視角

——岡田裕之氏の所論——

前稿においてわれわれは、「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」というレーニンの叙述について、それが「外国貿易の理論的研究」を「排除するもの」であるとする視角からの理解を——木下氏および有賀氏の所論にもとづいて——検討してきたが、本稿では、これとは異なった視角からレーニンの叙述の意味を考察しておられる岡田裕之氏の所論をとりあげて、吟味することにしよう。

（一）

岡田氏は論文「世界市場の具体的・歴史的性格について」（法政大学『経済志林』第三十巻第四号所収）において、まずつぎのように述べておられる。すなわち、「世界市場の具体的・歴史的性格は一般の認めるところであり、この性格そのものについては、あらためて強調するまでもないことである。ところが、世界市場のこの性格の承認から、世界市場の理論的再構成に関して相反する見解が生ずるのであって、一方の論者は、その理論的再構成は不可能であるとし、他方の論者は、その理論的再構成をなすべきである、とするのである（前者を代表するものは宇野教授であり、後者を代表するものは松井教授である）。」（同誌、一一五ページ）。これらの見解について、マルクスが『経済学批判序説』第三節「経済学の方法」において叙述した経済学の「科学的に正しい方法」（いわゆる上向法）にしたがって、「世界市場の理論的再構成を不可能であるとする説を〝異説〟として斥けることは容易なことではある。だがこうした断定は経済学の進歩に役立たないし、またそれによって理論的に再構成すべきだとする説の不正確な根拠が正当化されるわけでもない。我々は、世界市場の具体的・歴史的性格を単に言葉として承認するだけではなく、そこからすゝんで、それがいかなる意味において具体的であり、いかなる意味において歴史的であるか、を問わなければならない。いかなる意味において具体的・歴史的であるかゞ明かにされなければ、世界市場の理論的再構成に関して結論を得ることはできないし、また、〝具体的・歴史的〟と形容してみたところでそれは無内容な修辞でしかないであろう。」（同誌、一一六ページ）と。このように述べて、氏は、「世界市場がいかなる意味において具体的であり、いかなる意味において歴史的であるか」という問題を究明し、その究明をもって「世界市場の理論的再構成」への手がかりにしようとしておられるのである。

右の問題の究明にさいして、氏は、「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」というレーニンの叙述が「世界市場」にもそのまま妥当するもの、あるいはむしろ、それが「世界市場の歴史的性格」についていわれているもの、と理解しておられるように見うけられる。

「この（世界市場の――丹羽）具体的・歴史的性格の意味を明かにするために、我々は世界市場の具体的・歴史的性格を承認する上で重要な一典拠とされている、国外市場の歴史的性格に関するレーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』――以下『発達』と略す――における叙述の検討からはじめたい。」（同誌、一一六ページ）。

「……、『発達』第二論点（外国貿易の必然性についての第二および第三命題――丹羽）においてレーニンは、資本制生産様式の歴史的前提としての世界市場の歴史的性格についてゞはなく、ほかならぬ、資本制生産様式の結果としての世

界市場の歴史的性格を強調していた……。」（同誌、一六二ページ）。

「これ（『発達』第二論点――丹羽）は、明かに資本制生産の歴史的前提である限りでの世界市場に関する主張ではなく、資本制生産の必然的産物としての世界市場に関してなされている主張である。そしてレーニンは、この関連における世界市場についても『その歴史的性質』を主張するのである。」（同誌、一六二ページ）。

「『発達』第二論点においてレーニンの指摘した世界市場の歴史的性格は、これらの諸関係（以下に紹介するような氏の見解――丹羽）を補足することによって承認することができる。」（同誌、一六八ページ）。

「世界市場がいかなる意味において具体的であり、いかなる意味において歴史的であるか」という問題の考察にさいしては、氏は、まずレーニンの叙述を右のようにとらえて、そのうえで、外国貿易の必然性についてのレーニンの三命題に依拠し、またそれらの命題の観点からマルクスの叙述を引用しながら、「世界市場の歴史的性格」の意味を究明しておられる。したがってわれわれは、「世界市場の歴史的性格」についての氏の議論の内容をみることによって、氏がレーニンの叙述をどのように理解しておられるかを知ることができる、といえるであろう。われわれにとって問題となるのは、「『発達』第二論点において」レーニンの強調した「資本制生産様式の結果としての・あるいは資本制生産の必然的産物としての・世界市場の歴史的性格」についての氏の見解である。そこでまず、「『発達』第二論点においてレーニンの指摘した世界市場の歴史的性格」についての氏の説明を聞くことにしよう。(14) なお、「外国貿易の歴史的性格」についてのレーニンの叙述が「世界市場」にもそのまま妥当するもの、あるいはむしろ、それが「世界市場の歴史的性格」についていわれているものである、という氏の理解については、後ほどとりあげて検討することにしよう。

(14) 氏は「世界市場の歴史的性格」にさきだって、その「具体的性格」の意味をつぎのように説明しておられる。

「世界市場の具体的性格は、理論的再構成の全関連において持つ具体的性格であって、《単なる歴史》の持つその具体的性格ではない。」（同誌、一五五ページ）。

「世界市場の具体的性格は、……、資本制生産様式の諸規定の綜合としての、概念的な意味における具体的性格であるといわなければならない。資本制生産の全矛盾が綜合的に運動し、恐慌において集合的に爆発する――かゝる運動を必然ならしめるものとして、かゝる運動の担い手として、世界市場は具体的である。しかして、この具体的性格は、『世界市場』が『経済学批判』計画の上向の終点であることにおいて語られているのである。」（同誌、一六一ページ）。

「こゝ（資本によって作出される世界市場――丹羽）では、資本制生産の自立的生産様式の内的諸関連は、歴史と対立するものとしては現われない。世界市場を作出するということ

において表現され、実現される資本制生産の歴史的作用は、まさに、歴史的に特殊な生産様式としての資本の自己顕現にほかならない。世界市場を作出するという資本の歴史的作用、あるいは、この作用によって作出された世界市場の持つ歴史的性格は、資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するものである。

「しかしながら、世界市場の歴史的性格において示される資本の歴史的性格は、単にこれのみにはとゞまらない。資本制生産様式は〝生きた矛盾〟として、自らよびおこすところの生産力の無制限的発展と不断に衝突におちいるところの生産様式として、それ自身一つの自立的生産様式であると同時に、駆って自らを止揚するものである。自己を再生産すると同時に駆って自らを止揚するという、かゝる〝生きた矛盾〟として把握されてはじめて、歴史的に特殊な生産様式としての資本制生産様式の根本的特質が把握される。」（同誌、一六四～五ページ）。

「資本制生産様式そのものこの歴史的性格は、世界市場においてはじめて成熟した姿において明かにされるのであり、たゞ世界市場を通してのみ完全に発現されるのである。したがって世界市場を作出する、ということは『資本制生産様式の歴史的任務（die historische Aufgabe der kapitalistischen Produktionsweise）』（Das Kapital Bd. III, S. 482～3）である、というべきなのである。」（同誌、一六五ページ）。

右に引用した文章は、「世界市場の歴史的性格」についての氏の説明の中心部分をなすものである。氏は、右の引用文において、「世界市場がいかなる意味において歴史的であるか」という問題に答えておられるのである。ところで、右の氏の文章はきわめて含蓄のあるものであり、豊富な内容を有するもののようにみえる。以下、その内容をみてみることにしよう。

氏はまず、われわれが引用した第一のパラグラフにおいて、「世界市場の作出」は「資本制生産の歴史的作用」を「表現し、実現する」ものであり、後者は「歴史的に特殊な生産様式としての資本の自己顕現にほかならない」のであって、「世界市場の歴史的性格」は「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するものである」と述べておられる。氏によれば、「世界市場の歴史的性格」は「歴史的に特殊な生産様式としての資本の自己顕現」または「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」なのである。ここに傍点をうった言葉が、氏にあっては、重要な意味をもっているのである。氏は、つぎの第二パラグラフにおいて、傍点部分の言葉の意味をたちいって明らかにしておられる。

すなわち、第二パラグラフでは、資本制的生産様式は「それ自身一つの自立的生産様式」として「自己を再生産する」と同時に、「自らよびおこすところの生産力の無制限的発展と不断に衝突におちいるところの生産様式」として「自らを止揚する」という〝生きた矛盾〟として把握されなければならないの

であって、かくしてはじめて「歴史的に特殊な生産様式としての資本制生産様式の根本的特質が把握される」と述べておられる。氏がここで「資本制生産様式の根本的特質」を強調しておられるのは、つぎの点、すなわち「世界市場の歴史的性格」は「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」であるが、後者の「歴史的性格」とはなによりもまず「資本制生産様式の自己止揚」にほかならないという点、を明らかにするためであると考えられる。つまり、資本制的生産様式は自らを維持・再生産するばかりでなく、自らを止揚して、より高度な社会（社会主義社会）に移行せざるをえないということ、――この意味における「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」がまさに「世界市場の歴史的性格」である、と氏は主張しておられるのである。

だからこそ氏は、第三パラグラフにおいて、「資本制生産様式そのものの歴史的性格」は「世界市場においてはじめて成熟した姿において明かにされるのであり、たゞ世界市場を通してのみ完全に発現されるのである」と述べておられるのである。氏によれば、「資本制生産様式の自己止揚」を意味するところの「資本制生産様式そのものの歴史的性格」は、「世界市場」以外の他の経済学的諸範疇、たとえば「国家」や「外国貿易」、さらに資本制的社会の「内的構成」[15]をなす「資本」、「土地所有」、「賃労働」においては、「成熟した姿において明かにされない」のであり、「完全に発現されない」のである。他の諸範疇は資本制的生産諸関係を、したがってまた資本制的生産様式を「表現するもの」であるとはいえ、「自らを止揚する」という意味での「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」ではけっしてないのであり、それを「表現するもの」はひとり「世界市場」のみでなければならないのである。

(15) マルクスの「篇別」の「『一、資本。二、土地所有。三、賃労働。』はブルジョア社会（資本制社会）の『内的構成』をなし……。」（同誌、一五六ページ）。

続いて氏は、では、なにゆえに「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」が「世界市場」のみであるか、を明らかにしておられる。

「世界市場は……、資本制生産の内的諸限界が不断に克服され、諸制限として不断に突破され、かくしてこの突破に対する反撃が激烈な形態――恐慌――で生ずる具体的な場であり、『ブルジョア社会の全矛盾』が『集合的に爆発』する場であって、そこでは私的労働と社会的労働の矛盾は根拠を与えられ、発展せしめられ、完全に成熟した姿で運動する場を与えられ、かくしてその頂点に達している。」（同誌、一六六ページ）。

「世界市場恐慌の週期的爆発は、資本制生産様式の諸矛盾が、たゞ一時的に、暴力的にしか解決されえないことを示すものである。だから恐慌は、破壊された内的諸統一の暴力的解決として、資本制生産様式の自己維持とその新なる発展を

表現するものであるが、他面、諸矛盾がたゞ暴力的に、一時的にしか解決されないということは、資本制生産様式が止揚されなければならない、ということを表現するものである。」（同誌、一六六ページ）。

「週期的恐慌、景気循環――恐慌の反復を通しての止揚のこの〝強請〟は、さしあたり、全過程を通しての、私的所有の内部での私的所有の止揚の措定――したがってまた、私的労働と社会的労働の矛盾の、敵対的形態における止揚の措定――において現象する。そしてこの敵対的形態における止揚が、資本そのものの現実的止揚に直結する。世界市場のこの運動は、資本制生産の自己発展、自己維持のみでなく、その自己止揚を表現するものであって、世界市場においてこそ、資本制生産そのものの歴史的性格が現実に実証されるのである。」（同誌、一六七ページ）。

みられるように、氏によれば、第一に、「世界市場」は資本制的社会のすべての矛盾が「集合的に爆発する場」であり、私的労働と社会的労働の矛盾が「完全に成熟した姿で運動する場」であって、第二に、「世界市場恐慌の週期的爆発は、資本制生産様式の諸矛盾が、たゞ一時的に、暴力的にしか解決されえないことを示すもの」であり、恐慌による諸矛盾の一時的・暴力的解決は「資本制生産様式が止揚されなければならない、ということを表現するもの」である。したがって第三に、「世界市場の運動は、資本制生産の自己発展、自己維持のみでなく、その自己止揚を表現するもの」であり、このような「資本制生産様式そのものの歴史的性格」は他の諸範疇においてではなく、まさに「世界市場」においてはじめて「現実に実証される」のである。

要するに氏は、「世界市場がいかなる意味において歴史的であるか」という問題を提起し、この問題にたいしてつぎのように答えておられるのである。すなわち、「世界市場の歴史的性格」は「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」であり、後者の「歴史的性格」とは「資本制生産様式の自己止揚」の意味にほかならない。そしてこの意味における「資本制生産様式そのものの歴史的性格」は「世界市場」においてはじめて「表現されるもの」である。なぜならば、「世界市場」は資本制的生産の諸矛盾の「爆発する場」であり、「世界市場」における諸矛盾の爆発は「資本制生産様式の自己止揚」を「表現するもの」であり、したがって「世界市場」においてこそ「資本制生産様式そのものの歴史的性格」が「現実に実証される」からである、と。

(二)

氏が「世界市場」を恐慌と結びつけて、さらに「資本制生産様式の自己止揚」と結びつけて論じておられる点は、大いに注目されなければならないところであり、「世界市場」の正しいとらえ方を示すものであると考えられる。ところが、すでにみ

たように、氏は、「外国貿易の歴史的性格」についてのレーニンの叙述が「世界市場」にもそのまま妥当するもの、あるいはむしろ、それが「世界市場の歴史的性格」についていわれているもの、と理解しておられるのであり、しかも『発達』第二論点においてレーニンの指摘した世界市場の歴史的性格は、これらの諸関係（右に紹介した氏の見解――丹羽）を補足することによって承認することができる」と述べておられるのである。氏はレーニンの叙述をこのようにとらえて、そのうえで、外国貿易の必然性についてのレーニンの三命題に依拠して、「世界市場の歴史的性格」の意味を明らかにされたのである。

だが、いったい、レーニンの叙述は「世界市場の歴史的性格」についていわれているものであろうか？　あるいは「世界市場」にもそのまま妥当するものであろうか？　しかもそれは右のような氏の見解を「補足することによって」はじめて「承認することができる」ものであろうか？

われわれが前稿の註(4)に引用したレーニンの叙述――『ロシアにおける資本主義の発展』（以下、『発展』と略記する）第一章第八節「なぜ資本主義的国民にとって外国市場は必要か？」における叙述――からも明らかなように、レーニンは「世界市場の歴史的性格」ではなく、まさに「外国貿易の歴史的性格」[16]を強調していたのである。これはなんびとも否定することのできない明白な事実ではなかろうか。『発展』第一章第八節における叙述が「世界市場の歴史的性格」についていわれているもの、あるいは『発達』第二論点においてレーニンは、世界市場の歴史的性格を強調していた」とすることは、なんびとにもできないであろう。氏自身、「世界市場に関連しては、彼（レーニン――丹羽）は、ロシアにおける資本主義の不可能を主張するナロードニキを批判し、実現の問題に国外市場（あるいは外国貿易）を持ちこむ彼等の誤謬を指摘し、それに附随して、国外市場（あるいは外国貿易）の歴史的性格について述べたにとどまる」（同誌、一一八ページ）と述べておられるし、また「国外市場の歴史的性格に関するレーニンの『発達』における叙述」は「世界市場の具体的・歴史的性格を承認する上で重要な一典拠とされている」と述べておられた。だから、これらの文章から推測すれば、『発達』第二論点においてレーニンは世界市場の歴史的性格を強調していた」と氏が主張される場合には、レーニンの叙述が「世界市場の歴史的性格」についていわれているものという意味においてではなく、それが「世界市場」にも妥当するものという意味において主張されているものと考えられる。そして右のような氏の表現はただわずらわしさをさけるためにのみ用いておられるものと考えられる。

(16)　氏が述べておられるように――「外国貿易は国外市場とは異った範疇であって、『発達』においてレーニンはこの区別をとりたてては行っていない」（同誌、一六九ページ）――、『発展』においてはレーニンは「外国貿易」と「外国市場」を区別せず、両者を同じ事柄を意味するものとして用いている。

だが、「レーニンは世界市場の歴史的性格を強調していた」という氏の表現を右のように善意に解釈したとしても、なおつぎのような問題が残るであろう。すなわち、「外国貿易の歴史的性格」についてのレーニンの叙述が「世界市場」にも妥当するものとして、レーニンのいう「歴史的性格」を「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」とすることが、はたしてできるであろうか？と。

「世界市場」は、氏自身、さきに述べておられたように、資本制的社会のすべての矛盾が「爆発する場」であり、私的労働と社会的労働の矛盾が「完全に成熟した姿で運動する場」である。しかも、氏によれば、「世界市場」における諸矛盾の一時的・暴力的解決は「資本制生産様式の自己止揚」を「表現するもの」であり、この「自らを止揚する」という意味での「資本制生産様式そのものの歴史的性格」は「世界市場においてはじめて成熟した姿において明かにされるのであり、たゞ世界市場を通してのみ完全に発現される」のであった。これにたいして、「外国貿易」は資本制的な生産と交換の国境をこえてのひろがり、あるいは資本制的な生産と交換の対外的諸関係を示すものであり、[17] したがって「自らを止揚する」という意味での「資本制生産様式そのものの歴史的性格」を「成熟した姿において明かにし」、「完全に発現する」ものではありえないといわなければならない。このように「世界市場」と「外国貿易」とはその意味する内容をまったく異にするのである。もし両者の意味する内容が右のようにまったく異なっているとすれば、レーニンの強調する「歴史的性格」が「世界市場」にも妥当するとして、その「歴史的性格」とは「資本制生産様式の自己止揚」を意味するところの「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」である、と主張することがどうしてできるであろうか。

（17）氏は、「『国際関係』（『経済学批判序説』における「篇別」の第四項目――丹羽）は『経済学批判』序言では『対外取引』（『外国貿易』）である。けれども、『対外取引』（『外国貿易』）では、商品輸出入のみを表現するものと受けとられるおそれがある。輸出入は資本制生産の経済的な国際関係の最も基礎的な関係をなすとはいえ、なおその部分にすぎない。こゝではより一般的な意味を持ちうる『国際関係』――『生産の国際的関係』の意味――を採った。」（同誌、一六九ページ）と述べておられる。

氏が述べておられたように、レーニンはナロードニキ批判に「附随して、国外市場（あるいは外国貿易）の歴史的性格について述べた」のである。次節において詳細にみるように、ナロードニキはロシアにおける資本主義のための国内市場の問題を提起し、この問題にたいしてつぎのように答えた。すなわち、社会的総生産物のうちの剰余価値部分は資本家によって全部は消費されえないのであって、それは国内の小生産者か外国市場において実現されなければならない。だが、国内の小生産者は「零落」しているので剰余価値部分の買い手とはなりえないし、また外国市場はロシアのようにあまりにもおくれて資本主

義的発展の道に乗りだす若い国にとっては近づきがたいものとなっているとして、ロシアの資本主義は基盤のないものであり、存立しえないものであると主張していたのである。こうして、彼らは、ロシアの資本主義のための国内市場の問題に関連して、外国市場あるいは外国貿易の問題を社会的総生産物の実現の問題と結びつけ、「外国貿易の必然性」を実現の理論から導きだしたのである。レーニンは、このようなナロードニキの見解を批判して、外国貿易の問題と実現の問題とはまったく関係のないものであること、すなわち後者は「資本主義一般の理論にかんする抽象的な問題」（レーニン全集第四版第四巻、七〇ページ、邦訳、大月書店版、八九～九〇ページ）であるのにたいして、前者は「歴史的性格の問題」であることを明らかにし、外国貿易の必然性はこれこれの三つの原因によって規定される、と述べている。ナロードニキ批判にさいしてレーニンが問題にしているのは「世界市場」ではなく、まさに「外国貿易（あるいは外国市場）」なのである。そして、レーニンが「外国貿易の歴史的性格」を強調するさいには、右のようなナロードニキの見解を念頭において、抽象的な問題である実現の問題との対比において強調しているのである。[18] このような関連において強調されている「外国貿易の歴史的性格」についての叙述が「世界市場」にも妥当するものとして、その「歴史的性格」を「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」とすることがどうしてできるであろうか。すでにみたように、「外国貿易」は「世界市場」を除く他の諸範疇と同じように、資本制的生産諸関係を、したがってまた資本制的生産様式を「表現するもの」ではあっても、「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」ではありえないのである。それを「表現するもの」が「世界市場」のみであることは、氏自身が強調しておられたところである。

（18）レーニンは、『発展』においてばかりでなく、その他の諸論文においても、ナロードニキ批判に関連して、しばしば「外国貿易の歴史的性格」を社会的総生産物の実現の問題との対比において強調している。たとえば、論文「ふたたび実現理論の問題によせて」においてつぎのように述べている。

「第二に、ストルーヴェは、実現の抽象的理論（彼の論敵たちはもっぱらそれについて論じていたのであるが）を、あれこれの時代のあれこれの国における資本主義的生産物の実現の具体的な歴史的事情と混同している。これは、地代の抽象的理論をあれこれの国における農業資本主義の発展の具体的な事情と混同するのと、同じである。」（レーニン全集第四版第四巻、六〇ページ、邦訳、大月書店版、七五ページ）。

「実際には、この二つの問題（実現の問題と外国貿易の問題――丹羽）のあいだには、なんの共通点もない。実現の問題は、資本主義一般の理論にかんする抽象的な問題である。……。／（これにたいして――丹羽）外国貿易あるいは外国市場の問題は、歴史的な問題、あれこれの時代のあれこれの国における資本主義の発展の具体的な諸条件の問題である。」（同書、七〇ページ、邦訳、八九

～九〇ページ）。

「……、ヴェ・ヴェ氏は成立した資本主義社会における市場についてのまったく独特な理論をもちだしているのだが、その彼にロシアの農耕農民のことが指摘されているのだ。これこそまさに、実現にかんする抽象的・理論的な問題と、ロシアにおける資本主義にかんする具体的・歴史的な問題との、混同ではないか？それから、もしストルーヴェが、ヴェ・ヴェ氏の理論をたとえ部分的にも正しいとみとめているなら、――それはつぎのことを意味する。すなわち、……、外国市場の問題を実現の問題と関連させるあのまちがった見解をみすごしていることになる。」（同書、七四ページ、邦訳、九四～九五ページ）。

要するに氏は、「世界市場がいかなる意味において歴史的であるか」という問題を考察された結果、「世界市場の歴史的性格」は「資本制生産様式の自己止揚」を意味するところの「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」であり、しかも「世界市場」のみがそれを「表現する」、という結論に到達しておられるのである。このように、氏が「世界市場」の問題を「資本制生産様式の自己止揚」と結びつけて論じておられる点は、「世界市場」のとらえ方について重要な示唆をあたえるものであるが、しかしそのさい、氏が「外国貿易の歴史的性格」についてのレーニンの叙述を「世界市場」にも妥当するものとして、レーニンのいう「歴史的性格」を、「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」と理解しておられる点は、きわめて問題あるものといわなければならないであろう。しかも氏は、以上のような氏の見解を「補足することによって」はじめて、外国貿易の必然性の第二および第三命題においてレーニンが指摘した「歴史的性格」を「承認することができる」と述べておられる。したがって、氏によれば、以上のような氏の見解を「補足しないかぎり」、レーニンの強調する「歴史的性格」は「承認することができない」のである。だが、われわれは、氏がレーニンの叙述を「世界市場」と結びつけて、レーニンの強調する「歴史的性格」を「資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するもの」と主張しておられる点をこそ、「承認することができない」のであり、したがって氏の見解を「補足することによって」はじめて、レーニンの指摘した「歴史的性格」を「承認することができる」とする氏の議論もまた、「承認することができない」といわなければならない。

われわれは、レーニンの強調する「外国貿易の歴史的性格」の意味を考察するためには、なによりもまずレーニンの叙述そのものをとりあげて、それがどのような関連のもとに述べられているか、またその意味がどのようなものであるか、を明らかにする努力が必要であると考える。そこで節を改めて、当面のレーニンの叙述をとりあげ、その意味を吟味することにしよう。

三　外国貿易の必然性についての古典的規定
――レーニンの命題を中心にして――

本節においては、まずレーニンの叙述――「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」――がどのような関連のもとに述べられているかを、『発展』第一章第一～七節における理論展開をあとづけることによって考察し、つぎに同章第八節における外国貿易の必然性の規定を、したがってまた右の叙述の意味を吟味することにしよう。

1　ナロードニキ批判の論点

(一)

レーニンの名著『発展』の「目的」は、その副題――「大工業のための国内市場の形成過程」――に示されているように、「ロシアの資本主義のための国内市場がどのようにつくられつつあるか、という問題を考察すること」（レーニン全集第四版第三巻、三ページ、邦訳、大月書店版、五ページ）におかれている。ところが、この問題は「久しい以前から（ヴェ・ヴェ氏やニコライ・――オン氏を先頭とする）ナロードニキ的見解のおもな代表者たちによって提起されてきている」（同書、三ページ、邦訳、五ページ）。そこで、右の「目的」を遂行するためには、ロシアの資本主義のための国内市場の問題を提起し、それに誤った解答をあたえていたナロードニキ経済学者たちの見解を批判することにならざるをえなかった。かくして、『発展』はナロードニキ批判という課題をもつことになったのである。われわれが前稿の註(4)において引用した外国貿易の必然性についての三命題は、同書第一章「ナロードニキ経済学者の理論的誤り」のなかで述べられており、この章は「この著作のうちの事実をとりあつかう他の部分のためのいわば序論」（同書、四ページ、邦訳、六ページ）をなす部分である。そしてそこで、レーニンは、ロシアの国内市場の問題を提起し、かつそれに誤った解答をあたえた「ナロードニキ経済学者の理論的誤り」を批判して、「資本主義のための国内市場の問題にかんする抽象的な経済学の、基礎的な理論的諸命題」（同書、四ページ、邦訳、六ページ）を明らかにしているのである。

したがって、われわれが外国貿易の必然性についての三命題を、したがってまた「外国貿易の歴史的性格」の意味を正しく把握するためには、それらの命題が右のような「目的」をもった『発展』第一章において述べられているという事情を、とくにナロードニキ経済学者の見解にたいする批判との関連において述べられているという事情を、かえりみることが当面まず必要であると考えられる。そこで、以下、簡単に、かつわれわれの考察に必要なかぎりにおいて、『発展』第一章を、とくにナロードニキ経済学者の見解とそれにたいするレーニンの批判とをあとづけることにしよう。

いったい、ナロードニキ経済学者はロシアの資本主義のため

の国内市場の問題を、いいかえればロシアにおける資本主義の発展の問題をどのように提起し、またそれにどのような解答をあたえているのだろうか？

彼らは、「人民大衆が貧乏であり、そしてますます貧乏になっていきつつあるとき、わがロシアで資本主義が発展しており、そして完全に発展するということは、可能であろうか？」（レーニン全集第四版第一巻、六三ページ、邦訳、大月版、七三ページ）と問題を提起している。つまり、彼らによって提起された問題は、「ロシアにおいて資本主義の存立および発展は可能であるか否か？」ということであった。このような形で提起された問題にたいして、彼らは、「ロシアにおける国内市場は、農民の零落の結果として、また外国市場がないので剰余価値を実現できない結果として、縮小するし、また外国市場は、あまりにもおくれて資本主義的発展の道に乗り出す若い国にとっては、近づきがたいものとなっていると。――こうして、先験的な（しかも理論的に正しくない）考えだけにもとづいて、ロシアの資本主義は基盤のないものであり、流産の運命にあるということが、証明ずみと宣言」（レーニン全集第三巻、二三ページ、邦訳、二〇ページ）しているのである。つまり彼らは、第一に、「小生産者の零落」→「住民の購買力の縮小」→資本主義のための「国内市場の縮小」、第二に、「剰余価値は資本家によって全部は消費されえない」→「剰余価値を実現するうえでの『困難からの活路』は外国市場の獲得である」→だが外国市場はロシアにとっては「近づきがたいものになっている」、という二点を論拠にして、「ロシアにおける資本主義の存立および発展は不可能である」と答えている。みられるように、彼らは問題を「ロシアにおいて資本主義の存立および発展は可能であるか否か？」という形で提起し、この問題にたいしてロシアにおいては「国内市場も外国市場も『不可能だ』」（同書、四五ページ、邦訳、四五ページ）から、ロシアの資本主義は存立しえないし、ましてやその発展を語ることは「不可能」であると答えたのである。

右のようなナロードニキの見解を、レーニンはつぎのように批判している。すなわち、第一に、彼らが「小生産者の零落」から「国内市場の縮小」という結論をひきだしている点について。商品経済とその発展の基礎は社会的分業であり、社会的分業の発展は加工工業の採取産業からの分離、各種産業部門の専門化を推進する。そして「社会的分業のこの累進的成長こそ、資本主義のための国内市場の創出過程における基本的な契機である」。商品経済と資本主義経済との基礎である・この社会的分業の発展は、それを人口構成の点からみれば、「住民のますます大きな部分が農業から分離していくことを、すなわち農業人口を犠牲として工業人口が増加することを、意味する」。この現象が国内市場の拡大と不可分にむすびついていることは、「ほとんど証明する必要もあるまい」。だが彼らは、「その純理論的な議論においても、ロシアにおける資本主義にかんする議論においても」、このような国内市場の拡大を「まったく無視

している」のである。（同書、一五～一九ページ、邦訳、一三～一七ページ）。

また、単純商品生産が資本制的生産に転化する場合における「小生産者の零落」――彼らはこのことから「国内市場の縮小」という結論をひきだした――については、「生産者の一部分が生産手段から解放されるということは、かならずつぎのことを、――すなわち、これらの生産手段が他人の手にうつり、生産手段が資本に転化するということ、――したがって、これらの生産手段の新しい所有者は、以前には生産者自身の消費にあてられていた生産物を商品の形で生産する、すなわち国内市場を拡大するということ、――これらの新しい所有者は、自分の生産を拡大することによって、あらたな用具や原料にたいする、運輸手段やその他にたいする、同じくまた消費資料にたいする、需要を市場に提供する（これらの新しい所有者の富裕化は、当然、彼らの消費の増大をも予定する）ということを、予定しているのである」。また、生産手段から解放された小生産者は、賃銀労働者として自己の労働力を販売せざるをえなくなり、自己の消費資料のますます大きな部分を市場で手に入れなければならなくなる。したがって、「小生産者の零落」は、彼らがそのことから結論づけたこととは正反対のことを、すなわち「国内市場の縮小」をではなく、まさにその創出を意味しているのである（同書、一九～二一ページ、邦訳、一七～一九ページ）。

第二に、ナロードニキが社会的総生産物の価値のうち、不変資本部分と可変資本部分の実現（すなわちそれに相当する等価の発見、市場における販売）は困難ではない――なぜなら不変資本部分は生産にあてられ、可変資本部分は労働者階級の消費にあてられるから――が、剰余価値部分の実現は不可能であり――なぜならそれは資本家によって全部は消費されえないから――、そこで剰余価値を実現するうえでの「困難からの活路」は外国市場の獲得である、と結論づけている点について。彼らは社会的総生産物の価値のうち不変資本部分の実現は困難でないと考えて、社会的総生産物の実現の問題全体を剰余価値部分の実現に帰着させている。ところが、実際には、社会的総生産物の実現を説明する場合の問題の全困難は、まさに不変資本の実現の説明にあるのだが、「この困難をわが経済学者たちは気づかないのである」。外国市場が剰余価値の実現の「困難からの活路」であるという彼らの結論は、彼らが「資本主義社会における生産物の実現（すなわち国内市場の理論）をも、外国市場の役割をも、まったく理解しなかったということを、まったくありありとしめしている。実際に、このように外国市場を『実現』の問題にひきいれるということのうちに、ほんのひとかけらでも常識があるであろうか？　実現の問題は、どのようにして資本主義的生産物の各部分が、価値（不変資本、可変資本および剰余価値）の点で、またその物的形態（生産手段、消費資料、特殊的には必需品とぜいたく品）の点で、市場においてそれを填補する他の生産物部分を見いだすか、ということに

ある。このばあい外国貿易が捨象されなければならないことは、明白である。なぜなら、外国貿易をひきいれることは、いささかも問題の解決を前進させるものではなく、問題を一国からいくつかの国へうつすことによって、解決をおくらせるだけであるからである」。実現の問題に外国市場をひきいれても、その場合には外国市場での生産物の実現そのものが――すなわち販売される生産物部分にとっての「等価の発見」ということ、社会的総生産物のうち、その部分を填補しうる他の生産物部分の存在ということが――説明されなければならない[19]。（同書、二一～二五ページ、邦訳一九～二四ページ）。

（19）社会的総生産物の実現の問題を考察する場合には「外国市場を捨象しなければならない」ということは、マルクスがすでに明確に述べているところである。レーニンはマルクスのその叙述を引用して、ナロードニキの見解を批判している。

「資本制的生産は総じて対外商業なしには実存しない。だが、与えられた規模での正常な年々の再生産が想定されるならば、それによって次ぎのことも想定されている。すなわち、対外商業によっては、使用＝および現物形態を異にする財貨によって国内の財貨が填補されるにすぎず、価値比率は、――したがってまた、生産手段および消費手段なる二つの部類が転態されあう価値比率も、これらの各生産物部類の価値が分かたれうる不変資本・可変資本・および剰余価値の比率も、影響されないということ、これである。だから、年々再生産される生産物価値の分析に対外商業をもちこむことは、ただ混乱を生じうるのみで、何らの新たな契機も――問題のであれ、その解決のであれ――提供しない。だから対外商業はまったく捨象されるべきである。」（『資本論』インスティテュート版、第二巻、四七四～五ページ、長谷部文雄訳、青木文庫版第七分冊、六一六～七ページ）。

ナロードニキの見解を右のように批判して、つぎにレーニンは、社会的総生産物の実現の問題の正しい提起と解決を不可能にした基礎はまさにアダム・スミスのV＋Mのドグマであることを明らかにして（同書、二五～二九ページ、邦訳、二四～二八ページ）、『資本論』第二巻第三編「社会的総資本の再生産と流通」の理論の内容を簡潔に呈示している。そしてレーニンは、この理論からでてくる国内市場の問題についての主要な結論をつぎのように示した。すなわち、「資本主義的生産の、したがってまた国内市場の発展は、消費資料の増大によるよりも、むしろ生産手段の増大によっておこなわれる。いいかえれば、生産手段の増大は消費資料の増大をしのぐのである」。したがって、「資本主義のための国内市場の成長は、個人的消費の増大からはある程度まで『独立して』、生産的消費の増大によってより多くおこなわれる」[20]と（同書、二九～三六ページ、邦訳、二八～三六ページ）。

（20）ついでレーニンは、実現の理論が国民所得の問題において有する意義を簡単に指摘している（同書、三七～四二ページ、邦訳、三六～四二ページ）。

(二)

ナロードニキが国内市場の問題すなわち「社会的総資本の再生産と流通」の問題について語る場合には、彼らはこの問題を個々の商品の実現すなわち「それに相当する等価の発見」あるいは「市場における販売」ということで終始させている。いいかえれば、彼らはこの問題を個別的商品の実現――「商品のなかにふくまれている価値がその観念的形態から現実の貨幣に転態すること」あるいは「貨幣と交換に生産物を販売すること」――のよせあつめとしてとらえているのである。したがって、彼らにとって問題となるのは、社会的総生産物の各部分が実現される貨幣はどこにあるか、それら各部分の買い手はどこにいるか、ということだけである。国内市場の問題をこのようにとらえているということは、彼らが理論的見地をなげすてて、生産物の販売以外には何ものにも関心をもたない「個人企業家の見地」にたっていることを意味するものであるといわなければならないであろう。

右の「見地」にたつ彼らにあっては、社会的総生産物のうち不変資本部分と可変資本部分の実現は困難ではないが、剰余価値部分の実現は困難である。なぜならば、前者は生産および労働者の消費にあてられるが、後者は「資本家によって全部は消費されえない」からである。こうして、彼らは剰余価値部分が実現される貨幣を資本家および労働者のなかに見いだすことができない。そこでまず、国内の小生産者に目をむける。小生産者たちは剰余価値部分が実現される貨幣をもっていないだろうか？と。だが、小生産者たちは「零落」しているので、それを実現する貨幣をもっていない。したがって残るところは外国市場である。ところが、残念なことには、「外国市場は、あまりにもおくれて資本主義的発展の道に乗り出す若い国にとっては、近づきがたいものとなっている」。このように剰余価値部分が実現される貨幣を小生産者のなかにも外国市場にも見いだすことができないとすれば、――国内の資本家や労働者のなかにそれを見いだすことはとうていできなかったのだから――剰余価値部分は実現されないままに残り、したがってロシアの資本主義の存立および発展は「不可能だ」ということにならざるをえない。このようにみてくれば、「ロシアの資本主義が流産の運命にある」ということはまったく明らかではないか、という次第である。

右のようなナロードニキの国内市場の問題のとらえ方にたいして、レーニンは、彼らのようにこの問題を個別的商品の実現のよせあつめとしてとらえることなく、価値の点での、また現物形態の点での社会的総生産物の填補の問題としてとらえなければならない、ということを明らかにした。レーニンは彼らと同じように「実現」という言葉を用いているが、レーニンが国内市場の問題についてこの言葉を用いる場合には、その本来の意味――商品の価値がその観念的形態から現実の貨幣に転態す

ること――においてではなく、まったく新たな内容――社会的総生産物の各部分の価値および現物形態の点での填補――を意味する言葉として用いているのである。[21] レーニンは、すでにみたように社会的分業の発展は国内市場を拡大し、小生産者の「零落」は国内市場の創出を意味するということを示すとともに、国内市場の問題について語る場合の「実現」とは「等価の発見」あるいは「市場における販売」ではなくして、右のような新たな内容を意味するものであることを明らかにして、かかる「実現」の問題に外国貿易をひきいれることはまったく誤りであることを明確に示したのである。

(21)「では質問するが、資本家はその生産物を無償で外国人に提供するのだろうか？　あるいはまた、それらを海中に投じるのだろうか？　売るということは等価物を受け取ることを意味する。また、ある生産物を輸出するということは、他の生産物を輸入することを意味する。もしわれわれが、社会的生産物の実現についてかたるとすれば、われわれは、まさにそのことによって貨幣流通を排除し、生産物と生産物の交換だけを仮定しているのである。なぜなら、実現の問題は、価値および物材的形態の点で、社会的生産物のすべての部分の補填を分析することにあるからである。だから、実現にかんする議論を、『貨幣と交換に生産物を販売する』ということで終始させることは、消費資料における不変資本の実現の問題にたいして、『売る』とこたえることと同様に、こっけいなことである。これは、まったくひどい論理的な誤りである。こうして、ひとは、社会的総生産物の実現の問題からはなれて、『外国人への販売』以外にはなにものにも関心をもたない個人企業家の見地にふみまようのである。外国貿易、輸出を、実現の問題にからませることは、問題をより広い分野におしやるだけで、それを少しもあきらかにすることなしに、問題から逃避することを意味する。」（レーニン全集第四版第二巻、一四四ページ、邦訳、大月版、一四六ページ）。

だが、レーニンは、ナロードニキの見解を批判しつくすためには、外国貿易を社会的総生産物の実現の問題にひきいれるのは誤りであり、実現の理論の課題およびその内容はこれこれである、と説明するだけでは不充分であると考えた。より「積極的に」、資本主義にとってなぜ外国貿易が必然であるか、を明らかにする必要があると考えた。そこでレーニンは、『発展』第一章第八節「なぜ資本主義的国民にとって外国市場は必要か？」の冒頭で、「資本主義社会における生産物の実現にかんする前述の理論にかんして、こういう問題がおこるかもしれない。この理論は、資本主義的国民は外国市場なしにはやっていけないという命題と矛盾しはしないか？」という問題を提起し、この問題に答えて、両者はけっして矛盾しない、なぜならば外国市場の必然性はこれこれの三つの原因によって規定されるのであって、これらの原因はすべて「歴史的性格」のものであるから、と述べているのである。

われわれはつぎに、外国貿易の必然性の三命題、したがってまた「外国貿易の歴史的性格」の意味の吟味にうつらなければな

らない。

2　外国貿易の必然性の規定

(一)

ナロードニキは、右にみたように、国内市場の問題を個別的商品の実現のよせあつめとしてとらえて、社会的総生産物のうち剰余価値部分を実現するうえでの「困難からの活路」は外国市場の獲得である、という結論に到達した。こうして、彼らは「外国貿易の必然性」を社会的総生産物の実現の理論から導きだしたのである。しかも、彼らは、「その純理論的な議論において」、「外国貿易の必然性」をこの理論からひきだしているばかりではない。彼らは、かかる「外国貿易の必然性の規定」をロシアの資本主義の問題に適用して、外国市場を獲得しないかぎり「ロシアにおける資本主義の存立および発展は不可能である」と主張している。そして外国市場は、ロシアのように「あまりにもおくれて資本主義的発展の道に乗り出す若い国にとっては、近づきがたいものとなっている」として、ロシアの資本主義は「基盤のないものであり、流産の運命にあるということが、証明ずみと宣言」しているのである。つまり、彼らは、第一に、「その純理論的な議論において」、「外国貿易の必然性」を社会的総生産物の実現の理論から導きだしているのであり、第二に、かかる「外国貿易の必然性の規定」を「ロシアにおける資本主義にかんする議論においても」導入してきて、「ロシアにおける資本主義の存立および発展は不可能である」と「宣言」しているのである。

ナロードニキが「その純理論的な議論においても」、「ロシアにおける資本主義にかんする議論においても」、外国貿易の問題を実現の問題と結びつけて論じているということ、このことは、レーニンによる外国貿易の必然性の規定、とくに「外国貿易の歴史的性格」の意味を考察する場合には、しかと銘記されなければならない。なぜならば、レーニンは右のようなナロードニキの議論との関連において外国貿易の必然性を規定しているのであり、また「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」と述べているからである。まずわれわれは外国貿易の必然性についてのレーニンの第一命題からみていくことにしよう。

第一命題で述べられていることは、商品流通が広範に発展して国家の境界外にまででていくようになった結果、はじめて資本主義が出現したということ、すなわち外国貿易が資本主義生成の歴史的前提をなしているということ、これである。資本主義は特定の発展段階にたっした商品生産および商品流通を基礎にしてはじめて生成する。外国貿易の必然性は、まずこのことによって規定されている。外国貿易のこの原因は、社会的総生産物の実現の法則とはまったく関係のないものであり、「歴史的性格」の原因である。

商品交換は、その発生の歴史からいえば、共同体の内部でまず発生したものではなく、「諸共同体の終るところで、諸共同

体が他者たる諸共同体・または他者たる諸共同体の諸成員・と接触する点で、始まる」（『資本論』第一巻、九三ページ、長谷部訳、青木文庫版第一分冊、一九六ページ）のであり、共同体のこうした対外的接触において生産物がひとたび商品となるや、それは共同体の内部においてもしだいに商品となるのである。商品交換は歴史上、古くからおこなわれていたものであり、「いっさいの書かれた歴史以前に横たわる時代――エジプトでは少くとも紀元前二千五百年おそらく五千年にさかのぼり、バビロニアでは紀元前四千年おそらく六千年にさかのぼる時代――からのものである」（『資本論』第三巻、三四～三五ページ、長谷部訳、青木文庫版第八分冊、五六ページ）。商品交換の発展は商品の・商品と貨幣への二重化を生ぜしめ、かくして形成された貨幣は商品交換を助長する。そして商品交換は交換に入りこむべき過剰生産物の生産を促進し、したがって生産にたいしてますます交換価値を目あてとする性格をあたえる。商品交換およびその発展は、交換価値目あての生産を発展させることによって、旧来の生産様式にたいしていたるところで多かれ少かれ解体的な影響をおよぼすのである。ところで、商品交換は、商品の本性上、国際間においても当初からおこなわれていたのであって、商品の国際的交換は共同体の崩壊以降の歴史上のすべての時代にみられる現象である。したがって外国貿易は、程度の差こそあれ、古代社会においても中世社会においてもおこなわれていたものであるといえる。

資本主義は右のような外国貿易を基礎あるいは前提にしてはじめて生成する。マルクスはいう、――「商品流通は資本の出発点である。商品生産、および発展した商品流通――商業――は、そのもとで資本が成立する歴史的前提をなす。世界商業および世界市場は、十六世紀において、資本の近代的生活史を開始する」（『資本論』第一巻、一五三ページ、長谷部訳、青木文庫版第二分冊、二八三ページ）と。マルクスがここにいう「世界商業」および「世界市場」は、資本主義にさきだって形成されたところの「世界商業」および「世界市場」であり、資本主義生成の歴史的前提をなすものであって、いまだ資本主義の産物としての・結果としての・「世界商業」および「世界市場」ではない。資本主義の歴史的前提について、マルクスはつぎのように述べている。

「資本家が自己を資本として措定するために、自己の労働またはそれに類したものによって――ただ既存の過去の賃労働によってではなく――創造した価値を流通にもちこまねばならぬという条件は、ノアの洪水以前の資本の諸条件に、資本の歴史的諸前提に属するものである。こうした前提はまさにそのような歴史的諸前提として過去のものであり、それゆえ資本形成の歴史に属するが、けっして資本の現代の歴史に属するものでなく、言いかえるなら資本が支配する生産様式の現実の体制に属するものではない。たとえば、農奴の都市への逃亡は、都市制度の歴史的な条件と前提の一つである

としても、それはけっして完成された都市制度という現実の条件でもなければ契機でもなく、その過去の前提、その現状では止揚されているところの都市制度生成の前提に属するものである。資本の生成・発生の条件と前提はまさに、資本がいまだ存在せず、これからできあがることを想定している。したがってそれらの条件や前提は、現実的資本とともに、すなわちその現実から出発しつつ、みずから資本の現実化の諸条件を措定する資本とともに、消失する。」（『経済学批判要綱』、ディーツ版、三六三ページ、高木幸二郎監訳、大月書店版第三分冊、三九五ページ）。

資本主義がその結果としてのみ生成する外国貿易は、「ノアの洪水以前の資本の諸条件」に、「資本形成の歴史的前提」に属するものであり、したがって、「資本形成の歴史」に属するが、けっして「資本の現代の歴史」すなわち「資本が支配する生産様式の現実の体制」に属するものではない。それは、都市制度とそれの「歴史的な条件と前提の一つ」である「農奴の都市への逃亡」との関係と同様である。歴史的前提としての外国貿易は、資本主義が「いまだ存在せず、これからできあがることを想定している」のであり、したがってそれは資本主義の生成とともに「消失する」。この意味における外国貿易は、それが資本主義の生成にとっていかに重要な意義をもつにせよ、「歴史的前提として過去のもの」であり、「たんなる歴史」上の一範疇にすぎない。それは資本主義の「現実の体制」に属するものではないのである。この意味においては、「外国貿易の歴史的性格」は明らかであろう。

では、この意味における外国貿易は、経済学の対象として理論的に再構成することができるであろうか？

すでにわれわれが前稿において考察したように、経済学が問題とするのはこの地球上において十五・六世紀から生成し発展してきた資本制的社会であるが、しかしそれはこの社会の生成および発展の歴史そのものを問題とするものではない。経済学は「すでにできあがった」資本制的社会をとりあげて、この社会の「経済的諸関係の仕組み」を問題とするのである。したがって、資本主義が「いまだ存在せず、これからできあがることを想定している」ところの資本主義の歴史的前提は、経済学によってとりあげられるべき対象ではないといわなければならない。資本主義がその結果としてのみ生成するところの外国貿易は、明らかに資本主義の歴史的前提に属するものであり、それゆえ経済学の対象として理論的に再構成することはできないといわなければならないであろう。ところが、社会的総生産物の実現の問題は資本主義の「現実の体制」に属する問題であり、しかも「資本主義一般の理論にかんする抽象的な問題」である。したがって、資本主義の歴史的前提としての外国貿易と実現の問題とがまったく関係がない、ということは明らかであろう。

都市制度が「農奴の都市への逃亡」をその歴史的前提として生成したように、資本主義は外国貿易をその歴史的前提として

生成したのであるが、ひとたび生成するや、それはその存立のためにこの前提をつねに必要とするものではない。この前提は資本主義の生成とともに「消失する」。もっとも、ここに「消失する」というのは、外国貿易そのものの「消失」を意味するものではない。それは、資本主義が生成するやいなや、外国貿易の性格が資本主義の歴史的前提としてのそれから資本主義そのものによって規定された・資本主義の産物としての・それに転化することをいうのである。資本主義は前者の外国貿易の結果はじめて生成するのであるが、こうして、ひとたび資本主義が生成するや、今度は逆に、外国貿易が資本主義によって規定されるようになるのである。前者の外国貿易、すなわち資本主義の歴史的前提としての外国貿易については、経済学はそれを問題としてとりあげはしない。それが問題となるのは特定の国の資本主義を分析する場合においてのみである。その場合には、それは特定の資本主義の生成にとっての歴史的諸条件の一つとして考慮に入れなければならず、とりあげて究明しなければならないのである。

では、レーニンの第二および第三命題における外国貿易、すなわち資本主義によって規定されるところの・資本主義の産物としての・外国貿易もまた、その「歴史的性格」からして、経済学の対象として理論的に再構成することができないのであろうか？　われわれはつぎに、この外国貿易の検討にうつらなければならない。

(二)

レーニンの第二命題では、つぎのように述べられている。すなわち、社会的総生産物の実現の理論においては、社会的生産の個々の部分間の照応（価値の点での、また現物形態の点での）が前提されていた。社会的総生産物の実現の問題の考察においては、この前提が必要であった。しかし、実際には、その「照応」はたえず動揺し、たえず破壊されているのであって、それはかかる動揺を通してつくられる平均的な大きさとしてのみきまるのである。右の前提のもとでのみはじめて明らかにされうる実現の法則は、実際には、「照応」のたえざる「攪乱」を通じて貫徹している。そしてこの「攪乱」すなわち生産諸部門間の「不照応」または「不均衡」は、資本制的社会では必然的に生ぜざるをえない。なぜならば、資本制的社会においては、個々の資本家は互いに孤立して未知の市場のために商品を生産しており、したがって生産は無政府的におこなわれざるをえず、したがってまた個々の生産部門は不均等な形で発展せざるをえないからである。こうして、より発展した生産部門は市場を求めて、国外に進出していかざるをえない。これが外国貿易の必然性の第二の規定である。

第三の命題について。資本主義以前の生産様式の法則は従来と同じ規模での、従来の土台のうえでの生産過程の反復であった。これにたいして、資本制的生産のもとでは、こういう同じ

姿での、同じ規模での生産の更新は不可能となり、資本制的企業は必然的に共同体や地方市場や州の境界をこえ、さらには国家の境界をもこえて発展していく。生産方法の不断の改変と生産規模の無制限的な拡大とは、資本制的生産にとって必然的な傾向である。この傾向によって、資本制的な各産業部門は——国家の孤立性と封鎖性とはすでに商品流通によって破壊されているために——外国市場を求めて、国家の境界をこえて進出していかざるをえない。この傾向は資本主義の進歩的な歴史的作用を示すものにほかならない。これが外国貿易の必然性の第三の規定である。

ここに述べられている外国貿易は、第一命題におけるそれとは異なって、もはや「ノアの洪水以前の資本の諸条件」に、「資本形成の歴史」に属するものではなく、「資本の現代の歴史」に、「資本が支配する生産様式の現実の体制」に属するものである。いいかえれば、それは「ブルジョア経済体制」の構成要素の一つ——とはいえ、その二次的な要素——をなすものである。

経済学は「資本がいまだ存在せず、これからできあがることを想定している」社会を考察するのではなく、まさに「資本がすでに存在しており、すでにできあがった」資本制的社会を考察対象として、この社会を構成している複雑な生産諸関係およびそれらを支配し貫徹する諸法則を、論理的に整理された形で再生産するものであるとすれば、ここに述べられている意味での外国貿易は問題とされなければならず、精神的に再生産されなければならない。つまり、この意味における外国貿易は経済学の対象として理論的に再構成しうるし、またしなければならないのである。もっとも、資本制的社会を理論的に再構成するさいには、何を核にして、またどのような順序で再構成するか、という点が決定的に重要であるが、マルクスの「経済学の篇別」はその点を明らかにしたものにほかならないといえるであろう。

レーニンは、その第二および第三命題において、資本制的社会では生産諸部門間の「不照応」をもたらす不均等発展は必然的であり、生産方法の不断の改変と生産規模の無制限的拡大もまた必然的であると述べて、これらの必然的傾向から外国貿易の必然性を導きだしている。ここにいわれている「生産諸部門間の不均等発展」、および「生産方法の不断の改変と生産規模の無制限的な拡大」すなわち「資本制的生産の必然的発展」は、ともに資本主義にとって固有なものであり、資本主義にとっての法則であるといわなければならないであろう。すでにみたように、資本主義は外国貿易を歴史的前提として生成するのであるが、ひとたびそれが生成するや、それは外国貿易を自己の体制のなかに組みこみ、自己の存続のための条件につくりかえていくのである。資本主義が外国貿易を自己の体制のなかに組みこみ、自己の存続にとっての条件に転化させるうえで、決定的な役割をはたすものが「資本制的生産の必然的発展」の法則およ

び「生産諸部門間の不均等発展」の法則にほかならない。したがって、これらの法則との結びつきにおいて、これらの法則によって外国貿易の必然性を解明することは、まさに、唯一の正しい外国貿易の理論的考察であるといわなければならないであろう。レーニンによる外国貿易の必然性の規定は、いわば「外国貿易の必然性の理論」と名付けるべきものであって、外国貿易の理論的考察の見事な手本を示しているものであると考えられる。

ところが、レーニンは、外国貿易の必然性をこのように理論的に明らかにしたばかりでなく、第二および第三命題における外国貿易についてもその「歴史的性格」を強調している。いったい、レーニンがかかる外国貿易についても強調するところの「歴史的性格」とはいかなる意味のものであろうか？

右の疑問に答えるためには、外国貿易の必然性についてのレーニンの命題が『発展』第一章において述べられているという事情を、いいかえればナロードニキ批判との関連において述べられているという事情を、いま一度、想起する必要がある。すでにみたように、ナロードニキは、第一に、「その純理論的な議論において」外国貿易の問題を社会的総生産物の実現の問題と結びつけて、実現の理論から「外国貿易の必然性」を導きだしていたのであり、第二に、「ロシアにおける資本主義にかんする議論においても」かかる「外国貿易の必然性の規定」をもちだしてきて、「ロシアにおける資本主義の存立および発展は不可能である」という結論に到達したのである。彼らが「その純理論的な議論においても」、「ロシアにおける資本主義にかんする議論においても」、外国貿易の問題を社会的総生産物の実現の問題に関連させて論じている以上、レーニンのナロードニキ批判もまた、これら二つの「議論」をとりあげざるをえなかったのである。レーニンは彼らの「議論」をつぎのような順序で批判している。

まず第一に、レーニンは、『発展』第一章第八節にさきだって、ナロードニキの「純理論的な議論」をとりあげ、それを批判して、社会的総生産物の実現の問題は「資本主義一般の理論にかんする抽象的な問題」であって、この問題を考察するさいには外国貿易の捨象および生産諸部門間における均衡的配分を想定することが必要であること、そしてかかる想定のうえにたって社会的総生産物の各部分の塡補がいかにおこなわれるかを究明することがこの問題の課題であること、これにたいして外国貿易の問題は資本制的な生産と交換の対外的なひろがりの問題であり、実現の問題とはまったく関係のないものであること、したがって実現の理論から外国貿易の必然性を導きだすことはできないこと、を明らかにして、『資本論』第二巻第三篇の内容を簡潔に呈示したのである。

外国貿易の捨象は社会的総生産物の実現の理論にとって必然的な前提であったが、「しかし、外国貿易を捨象するからといって、実現の理論は、外国貿易のない資本主義社会がかつて存

在したことがあるとか、あるいは存在しうるなどとは、けっして主張しない」（レーニン全集第四巻、六一ページ、邦訳、七七ページ）。実際に、いまだかつて、外国貿易をもたない資本主義国は存在しなかったし、またそのような資本主義国を考えることもできない。そこでレーニンは、第二に、第八節「なぜ資本主義的国民にとって外国市場は必要か?」において、「この理論は、資本主義的国民は外国市場なしにはやっていけないという命題と矛盾しはしないか?」という問題を提起し、この問題に答えて、それは矛盾しない、なぜならば外国貿易の必然性は社会的総生産物の実現の法則によって規定されるのではなく、「資本制的生産の必然的発展」の法則および「生産諸部門間の不均等発展」の法則によって規定されるからである、と述べている。

レーニンがこれらの法則との結びつきにおいておこなった外国貿易の必然性の規定は、すでに述べたように、いわば「外国貿易の必然性の理論」というべきものである。そしてこの理論は、実現の理論が抽象的な理論であるのにたいして、より具体的な理論であるといわなければならないであろう。ここに「より具体的な理論」というのは、つぎのような意味においてである。――すなわち、実現の問題は『経済学批判序説』における「経済学の篇別」の(二)の項目「ブルジョア社会の内部的仕組みをなし、また基本的諸階級が存立する基礎となっている諸範疇、資本、賃労働、土地所有」に――しかもこれらの諸範疇のうちで基本となる「資本」に――属する問題である。これらの諸範疇は「資本主義そのもの」を、いいかえれば一国内部における生産と再生産の諸関係およびそれらを支配し貫徹する諸法則を示すものにほかならない。これにたいして、外国貿易は、「資本主義そのもの」によって生みだされたものであり、しかも資本主義の存続を外部から規定する要因である。外国貿易はこのような要因として資本主義にとって二次的な意義を有するにすぎないのである。したがって、資本主義を理論的に把握するためには、「篇別」の(二)の項目、すなわち「資本主義そのもの」を基本にして考察しなければならず、外国貿易は「資本主義そのもの」の把握のうえにたってはじめてとらえることができるのである。だから、外国貿易の必然性の理論は社会的総生産物の実現の理論に比してより具体的な理論であるといわなければならない。(22)

(22) 渋谷将氏の論文「外国貿易論に関する覚え書き」（『帝京経済学研究』第一巻第一号所収）は、「『資本論』と『外国貿易』の関連を中心として」という副題をもつものであるが、「外国貿易論の性格と内容」（同誌、四八ページ）、いいかえれば外国貿易の理論的位置づけについて考察したものである。

この論文において、氏は、「外国貿易論」を、したがってまた一般的に「理論」をきわめて抽象的なものと理解しておられるように見うけられる。氏にあっては、外国貿易の問題が実現の問題に比してより具体的な問題であるとはいえないのであり、「抽象的なもの」と「具体的なもの」との関連が問題となるのは「経済学の篇別」の各項目それぞれについてその内容を考察する場合に

おいてのみである。したがって、外国貿易の必然性の理論が実現の理論に比してより具体的な理論であるとすることは、まったく誤った主張であるということにならざるをえない。このような氏の「外国貿易論」の理解は、氏の「理論」のとらえ方、および「抽象的」と「具体的」との関連、つまり「論理的」ということの意味の把握が問題であることを示すものといわなければならないであろう。

「もともと、このようなこと（外国貿易についてもその一般的研究においては、『観念的平均における叙述』は適用しうるし、『現実的諸関係はその概念に照応するものと前提』されなければならないということ――丹羽）は、一般的な理論というものは、つねに抽象的なものであり、また抽象的なものであるからこそ一般的な理論となりうるのだということを考えるならば、ほとんど自明のことである。したがって、外国貿易論が一般的理論として成立すると主張することは、同時にそれが抽象的なものであること、またそのようなものとして抽象的なものから具体的なものへと展開されなければならないということを意味している。」（同誌、五二ページ）。

「……、『再生産の法則』と『利潤率の傾向的低落の法則』とは、ひとしく『観念的平均における叙述』として抽象的な理論であるが、同時に、その各々が、それに固有の独自の抽象性をもっているといわねばならない。そうして、このことは外国貿易論の性格を理解するうえでも、重要な意義をもっている。すなわち、……、外国貿易論についても、問題は理論一般のもつ抽象性という意味での抽象的性格にあるのではなくて、外国貿易論にとって固有の抽象性をとらえることがむしろ問題なのである。」（同誌、五六ページ）。

「……、『経済学批判序説』における『生産の国際的関係、国際的分業、国際的交換、輸出入、為替相場』という序列は、外国貿易の分析の内容を示す、抽象的なものから、具体的なものへの上向の序列として、きわめて重要な意義をもっており、……。」（同誌、六四ページ）。

右のように、外国貿易の問題は、実現の問題のように「資本主義そのもの」に、いいかえれば資本主義の一般的諸法則にかんする問題ではなく、資本主義のより具体的な諸法則との関連ではじめて問題となるものであり、資本主義の歴史的発展を外部から規定する諸条件の問題である。つまり、それは、一般的諸法則の把握のうえにたって、資本主義の発展がどのようにおこなわれるか、というより具体的な問題を考察する場合にはじめて問題となるもの、または一般的諸法則が資本主義の歴史的発展において発現するさいに問題となるものであり、資本主義の歴史的な発展法則にかんする問題である。したがって、「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」というレーニンの叙述の意味は、まず右のように、それが資本主義の一般的諸法則にかんする問題ではなく、資本主義の歴史的な発展法則にかんする問題であり、資本主義の歴史的発展を規定する外部的諸条件の問題である、ということだと考えられる。

第三に、ナロードニキが「ロシアにおける資本主義にかんす

る議論においても」外国貿易の問題を社会的総生産物の実現の問題と結びつけて論じている点について、レーニンは、彼が明らかにした外国貿易の必然性を立ちいって究明するためには、「個々の産業部門、国内におけるそれの発展、資本主義的産業部門へのそれの転化を、考察しなければならない。一言でいえば、国内における資本主義の発展の諸事実をとりあげなければならない（одним словом, надо взять *факты* о развитии капитализма в стране）」（レーニン全集第三巻、四五ページ、邦訳、四五ページ）と述べている。ここに「諸事実」とは、特定の時代の特定の国における（レーニンにあっては当時のロシアにおける）資本主義の発展の歴史的諸事実をいうのである。だから、この「諸事実をとりあげなければならない」という意味は、ロシアの資本主義における外国貿易の問題を論じるためには、ナロードニキのようにそれを実現の問題と結びつけて、ロシアでは「国内市場も外国市場も不可能」であり、したがってロシアの資本主義は「流産の運命にある」と「宣言」することなく、ロシアの「国内における資本主義の発展の諸事実をとりあげて」究明しなければならない、ということであると考えられる。レーニンはこの「諸事実」という言葉をイタリック体にして強調しているが、それは、ナロードニキが「まったくなんの役にもたたない（またなにごともかたらない）空文句をならべたてて」、いっこうに「諸事実」を究明しようとせず、「ロシアの資本主義の存立の不可能性」を「先験的に宣言」していたからである。レーニンの強調する「外国貿易の歴史的性格」の意味には、このような「特定の時代の特定の国における資本主義の発展の歴史的諸事実」もふくまれているものと考えられる。

要するに、レーニンが「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」という場合には、レーニンは、ナロードニキが外国貿易の問題を社会的総生産物の実現の問題と結びつけて論じていたことを念頭においていっているのであり、抽象的な問題である実現の問題との対比においていっているのである。そしてレーニンは、「外国貿易の歴史的性格」のなかに二重の意味を、すなわち第一に、外国貿易の問題は資本主義の一般的諸法則にかんする問題ではなく、資本主義の歴史的な発展法則にかんする問題であり、資本主義の歴史的発展を規定する外部的諸条件の問題であるということ、第二に、特定の国の資本主義における外国貿易の問題を論じるためには、その国の「資本主義の発展の諸事実」をとりあげて究明しなければならないということ、を含めて述べているものと考えられる。レーニンが「外国貿易の歴史的性格」のなかにこのような二重の意味を含めているのは、ひとえに、ナロードニキが「その純理論的な議論において」ばかりではなく、「ロシアにおける資本主義にかんする議論においても」、外国貿易の問題を実現の問題と結びつけて論じていたからであり、かかる彼らの「議論」を批判することがレーニンの課題であったからである。

しかも、レーニンにあっては、右の二重の意味のうち後者がとくに重要であったと考えられる。なぜならば、『発展』の「目的」は、「ロシアの資本主義のための国内市場がどのようにつくられつつあるか、という問題を考察すること」におかれていたからである。ナロードニキはロシアの資本主義を問題としたのであるが、彼らは外国貿易の問題を社会的総生産物の実現の問題に結びつけて「ロシアの資本主義の存立の不可能性」を主張していた。だから、レーニンは、右の「目的」を遂行するためには、かかる彼らの見解を批判せざるをえなかったのである。レーニンは、「外国貿易の必然性」を社会的総生産物の実現の理論から導きだし、それをロシアの資本主義の問題に適用した彼らの誤りを批判して、実現の問題とロシアの資本主義における外国貿易の問題とがまったく関係のないものであることを明らかにせざるをえなかったのである。

むすび

以上、われわれは、「外国貿易の問題は歴史的性格の問題である」というレーニンの叙述の意味を、諸先学の見解の検討を通じて、考察してきたのであるが、この考察によって、第二および第三命題における「外国貿易の歴史的性格」には右のような二重の意味がふくまれていることが明らかになった。そこでわれわれは、外国貿易は資本主義においてどのような位置をしめるものであるか、という問題について、以上の考察からでてくる結論を示すことによって、「むすび」にかえることにしよう。

マルクスの「経済学の篇別」の諸項目はすべて資本主義の構成要素をなすものであり、資本主義の維持・再生産にとって本質的なものばかりであり、資本主義の存続を規定するものばかりである。とはいえ、その諸項目のうちで基本となるのは㈠の項目「ブルジョア社会の内部的仕組みをなし、また基本的諸階級が存立する基礎となっている諸範疇、資本、賃労働、土地所有」であるといわなければならない。この項目において述べられている諸範疇は、「資本主義そのもの」を、いいかえれば一国内部における生産と再生産の諸関係およびそれらを支配し貫徹する諸法則、または資本主義の一般的諸法則を示すものであり、資本主義の存続にとっての基本的要因なのである。これにたいして、㈣の項目「生産の国際的関係」、したがってまた外国貿易は「資本主義そのもの」によって規定されて生ずるものであり、しかも資本主義の存続を外部から規定する要因、または資本主義の存続にとっての外部的条件にほかならない。そしてそれは、このような要因または条件として、資本主義にとって二次的な意義を有するにすぎないのである。したがって、ナロードニキのように「外国貿易の必然性」を社会的総生産物の実現の理論から導きだすことは、「篇別」の㈠の「資本主義そのもの」または「資本主義の存続にとっての基本的要因」の問題と、㈣の「資本主義の存続にとっての外部的条件」または「資

本主義の存続を規定する外部的要因」の問題とを、混同しているものにほかならないといえよう。

なお、注意されなければならないことは、資本主義の帝国主義段階への発展とともに、資本主義にとっての外国貿易の意義が変化するということである。すなわち、資本制的生産の発展によって国内で形成された金融資本は、全世界にたいする自己の支配網を確立し強化していかざるをえない。金融資本の全世界にたいする「抑圧と収奪、搾取」の関係を形成し強化する主要な契機として決定的な意義をもつものが、「資本の輸出」であり、「国際カルテル」であり、「植民地の領有」である。そして金融資本は、もはや一国内部の諸要因によってのみではなく、右の諸契機を通じて形成・強化されるところの国際的な支配網によっても支えられているのである。いいかえれば、右の諸契機はたんに「帝国主義の存続にとっての外部的条件」ではなく、「帝国主義そのもの」を示すものであり、「帝国主義の存続を規定する基本的要因」であるといわなければならない。かくして、「篇別」の㈣の項目の諸範疇、したがってまた外国貿易は、右の諸契機とならんで「生産の国際的関係」を示すことになり、しかも右の諸契機によって規定されるようになったのである。(23)

(23) レーニンは、『帝国主義論』第四章において、「自由競争が完全に支配していた古い資本主義にとっては、商品の輸出が典型的であった。だが、独占が支配している最新の資本主義にとっては、資本の輸出が典型的となった」（レーニン全集第四版第二二巻、二二八ページ、邦訳、大月版、二七七ページ）、「資本の輸出は商品の輸出を促進する手段となる」（同書、二三二ページ、邦訳、二八一ページ）と述べている。

（一九六七・九・一五）